龍田
社て
宮家
麁
紀筆稿

幸坂
幸坂

龍田

曲出一拍子九
位中　五

次第
ひとつ神のみちもわきてぢく
かそとおくのりをおさまん
是ハ
六十よ志うに法経をおさむるひ
志りにて候我此ほとハ南国に
まのひくまいりまいらせ

つもるおもふおもふくひが又見ゆかわ
ゆ田ふようかゞいられへと思ひ
ふうさおあうれやことらわ
くかくる明のうくさまの花
わたちとよそていかくやくま
るしわさのやとやゆのすみち

かのうゑのさゆりのはなにゝてく
いそうの桜よそ見てやさつきかは
つきくらひ山川をもしらぬ桜にあかす
とやとらひらかなさる川かはるさ
アおひそア人へきそのは　ふや
おい山川をみわたせはこゝの花に

まりはやさしく侍らて川のあたり
そよはかりはそ（女）されとも様よ
まりの名も神無てわれはなけれ
もやくもおくまてあまた神（トニ）
人々の中やさしあんなくわれこそあま
つなかゝ（甲行）實今ひとりまてまつる

川よみちのまいれくおうかたのゝ
かなしき中やさしなんなのだち（かん）おやめ
とえいや（女行）中それのまちこがま
ちれかにちりうえてかきとれし
ゆこいくおまいりとやかしさ中やさ
えるんこるわたれいつきはにかつて

花ともみえしハなかくいやれは
さいかうれおそれ候とも今ハいたはしう
めのふしんもある
ワキカヽル
實にそれハさうなう
かまへだにもみられはとさきたつくか
みおりくともうとこ涙かくれ
たとまゐくともみやぬなかりゆうき也あへ

まちうくゆん
女詞
いやくれとも汲さ
うわらだ氷にとぢ文中えんぞのたちいま
しめともある龍と
ワキカヽル
かしこやもえら
れあしさなして氷にとぢ文中えん
とのだいもとハいつなかりの風ん
サシ
かみちのこハみなくれ限せいだ文その

はらわうわうこにまつる川のみちを
とはそうもそれにてはそれはも中や
うたなるかさをてかやうによろこふ
ましかるかうはよみちよかきるかつす
水にも中の名にかうさ川く
かしさわらく禅音月の影川よる

ゆまくもかみちとけろうすれ
おさけなや中くさきこたく
はんなやさるるさてわやうこそ
なく風うそよむ知られるきいい
ましろさまくれく　此方いは
あるうへまくまちれそ　聞いうん

なをさらにくたひの藤はなのもとにみ
ちるまでハ見ん　ワキ　わらはしや此と
色ふかめてりふきふまうにほくの
女　藤花の名に此所の藤なれハ
此おりふし　ワキ　かゝるやさしき藤浪ハ
見事ハ名にし花のもとに見えし

ぎしさえひしさやこれみえさ
まさるわかなるみち見えしみにさそ
ハ此藤浪にくひゆ　女　さんたらめ
とりの此藤乃藤浪ハもとさかわだ
うしやハ紅葉ハあくまでよしわざと
なかと藤浪をわするゝまじ也

（甲）ひとつやまにしもそゝろにおもひ

御禊よろこひのかくこそきこゆ

とゝとゝらんかららえんのいつゝめ

いさうゑやうゐうハつきかのおもひ

下のみちを思にましろ祈ん代と共ら

うけのゝ流をうけしもともちかきや

清史のよはひハづかねされあへぬを

なかにびんしくやをわしりみちく

ねさの辣んかうひんもともとまるう

たいうてされこの清やうくれおもて

れさこまさうゆえいざさえめらうも

むめんとくかとしおやうてこむおか

しかもこのさきだちとぞらくみ
乙女子がかざしもそでに神とか
ざしたゝふわかのとくかな
かさなる万人之神よみてまさる今
遠らんあるごとみてはるかなれ
いはい社やうびかりし也

かのひとあまとれ身わむろと
もたらくれしなるの神とうし
うづまさやさんだいこそしもひくき
はてんふの世ふひろく社の
れおにはやとかくみつかれし
をともまん出く神をもとしさき

なくらく涙はいまいとぞある
いとどなるとよしやさらに川
ほてんまさらにぬいたらてこそ
つみをもふかく身の為乃月に
りひれむらしくおもふ薬
とのふらひわもおそのむかしに

やさくれさてほ涙こそわするれ
まれにうきやよわさびわさ
をしらぬときめく眼代とゆすられは
ほどとまもうじもちれいやく薬
のみぞおもらほどのしされあまた下
かいもぬかんそこのかわりていひつき

ぐやうぶんふぜんじやうわうらうなれば
松たきまりつの緑樹みどりをあらはち
とうらいやの峰る道岩てんそれ
みしのあとをあわきうなる緑かしく
のや あらはれ(?)かうおく浪せきさ
里わめつちおさまるみよのあしさ

あんせんふゆくりなるとひとぞまたう
しやれのしなり こちとみの秋
よろこびのいろせんしやうのみけしき
せんらんれしこゑりみちもあ
かうて月こゑや秋のこずゑ
こゝもこうせも海色も波志ずかや

みむろのしらぬ秋のつゆなれど
されハ此山の色も紅葉かならべき
かミハよくの御ともとそめて
ちハやぶるの山のあさぢまとこゑ
もみぢハ錦ぞことさらにちるも
めぐみハをさらわれハこうのさう

いはそこさぞ色や花のちるとも
らんめぐみもとも玉弁にんをと
そかしあいなるあ錦かひの見ん
むろのさやくれなゐさへの河
わたらハなかとも玉くずのちる絹
らはとらまん中よの川はかちとて

たつた川もみぢをとぢし薄氷や
はぢみしその今ハ氷れるもみぢ
おかれくやい綾くれなゐのみちハ
さきれうを氷にとゞかりみちもなし
もかさくゆるへやいりく今ハ
思ふらん　声さう給ふよくゝの

時うつるをきくとをのぞ餘波をしい
ころく月も影もおもてにさそふか
あそび夢もむなしや　錦とさい
久しき月もおもふろ深き　浪の
立田の神の手まくらのかみ
すゝ則ちこの神さ　立田の神とせんとて

一ト ニ ニ 丶 トレテ ニ ニ ニ 丶 丶 ハル ニ ニ 丶 丶 一

出かる身八 ろくのその夢 ふ何

丶 ニト ニ ニ レテ 一 一 ト ト ニ 一 一 上門 ニ クル ニ ニ クル

やかるゝ八 そよそよ中々ゝ色松

ニ ニ ニト ニ 丶 ト ト ニ ニ ニ ニ ニ ニ ニ

風吹くゝ色くまみちも蔵らゝ中か

ニ 丶 ニ ニ ニ ニ 丶 ニ ニ ニ ニ ニ ニ ニ

つもる鳥のみそさとぬきむひろくかなに

ニ ト ニ ニ 丶 丶 ニ ニ ニ ト ニ ニ ニ クル

あふさんやうさいそいくさいとい二よ

ニ ニ ニ ニ 上 ニ ニ ニ ニ ニ ニ ハル

何業本らく色泊くさか上るせのひかり

口伝

松長 曲出一拍子 佐中強 居

是ハ讃岐青野るよれ都ゐ備

よくば梅色山家平治のこゑ

ぬよと色歌と流ひきば中にも

夫文字松長ハみの国あふされ

是は(?)くふさく是かいしまくあひきかう

あはれ秋とも物おもふゆふぐれの
まくは浮どもいそぐの露にくれ
ばれ迄とも見つゝひやさんを思ひ立くは
あふちやせてつも積ら濱がく
花紛と見ハめ花山とひその露を
おもとことをまよいふきの嵐のぶハ

のやどりともしらずゆきくれてその宿
小萩はらく　花のあるじや梅松風
やどの花の匂ふ松風や音にもとふらみ
なりけん　見ハわたせば花の色にて
それ萩の露の光はいかさん
かくひまもおはしまさでありけり

ひかりにまいりさらぬのひとも
ぐんのかけさとゆめの人ハげうの殿の
あとのミぎはり袖の花もさかり
中 りやうもとへさしかゝるもとのうらゆか
ぱ月さゆるか ウ ひかりハかまをとめ
よもの月日の数ハかけとふりく

上ヲ
ウヤ 雲の中ゆきにかゝるひものく
ご汲せうかき今はやあとをても旅さ
またおもひてハわしうけのかんにせて
ウ かくいりし有様とかわりはわりしは
さきやく ふきやかひけいむさ
よそとまたかくハさ七月くのあわれ

とうて梅かえのやかたに旅人へごたんさ
せめてハ浦の名がらさとかへし給へとの
よろこひもひまなく今そまさに梅かえを

手引
さんは是ハ鈴木かゆかりの名ありめかく
いかにはおとこふうひやうさんまでまて
身のうへあらものは

女
なゆかりの者なりや梅がえ

のはらあるかたに人くるまに梅ヶ枝

男
是ハ鈴木殿のゆかりのものと名のりしが着ざは
ひとつの寺をさくれいと梅が枝のはたや
ますます仁におもはく鎌のまわりけるとかり
ては心にも病ひ下はおこうふうひやう故
ハひひつきまとひてこゑをのんでぞ泣家

わかれとなりゆく心はそうわんなやゝ
身をやつしぢ思ひの下ひもとけて　女　梅が枝
まことにうれしきこそそれ白きとも兒
げにやかも一枝の花の香にものをぞ思ふ
果なる八ば所成がさきのことよすゞか
様よ第八番了ちし　半太夫　宮へ行や哉

ことくとすきに浪のはちすらばなもさ
世のはかなくう　女詞　常とも一樹の陰の宿
つだ他生のえんとも時ハいかなるえにしと
二世のちぎりに　半太夫　小ふしも中にも宿に
ミゝく　女　第ふ報とも　半　給ひし　上ミ同　声の
えんのきとわひよわすれめぐ浪の

頼りなきものゝ御手を取り給へば涙のみ
くふられこの上はさおもひ給ひつ
わさもとり給ひ給ひつれの道までも
定和郎の夕霧一度んの雲のかゝり
えしそらんは文をかくらもおもき給へ
表あらはさく　いかにゆふぎりどの

此さいごの有様委細にかたりせよ
ばふつきく痛りや昔年の今
わ殿よ今くにぞわかれをおしく見
いで親御之御心中よまさまて候ぞ
龍よりぞひらき心あの恩をあまつ
人ぢよ今あの養親にあやくがきまれ

あんま丸ハ御ぜん童と成ふしける
あゝ河よ所にて生のまれうつへいたら
首へさこなわず文御身長御父へ剃長
くひうのはといふぜうく教しおひうら
頼朝文人衆つれ行くに御長の御はた
くがじわたれくと二十ろのかず種

国其のあわぜいうて御主風情ひらにひき
ひきせのへハ御長御おと語ら申給ひを
もハにしや御たくゑねもくまかる候そ
こくがしわてもまハ首種悲を討れ
朝伴こくあらしがうそこ給ふましよね
御長いうの下よりわさん御数人くるまに

てもさのはぞいさごとて[illegible]しぞひ
しと馬よりかるみえぬ事なれ共今
一足もひかじとのまぬれば道よそしとてま
かたいばいねまていとへど[illegible]ざしとも[illegible]
せんをとも[illegible]をてもかさく[illegible]よ[illegible]も
ひすのさしそのひのひのかさ共[illegible]ござ

世ひらんまてれんた[illegible]とさこされ
わかたしなさうひ[illegible]の[illegible]にけらん
らずおまわれはおもふへ見にくおいと
まのあたりんと見とさへこのおまもれ
くおとさん[illegible]をへ[illegible]清[illegible]待
てかけの世をへ[illegible]宵[illegible]はやそれ[illegible]

[illegible]

三世十方の仏陀の聖衆もあはれむ

[illegible]

山遠嶺のひゞきかまの山紅とけぬとまつ
小田の雨も世をまてと 拍 獄よれんでう
有りてふ心澄く光に 女 流の名残
わく山僧小の花や匂ふらん 拍 梅花の
盛いかむ秋よ程すおよけ 次
名も花毛香色のふ花 拍 観音

せん法ふとまりて 上 寿 よるの山やまの山
風月やをさふく光やうく春の
秋の錦ふりとさ海をとち みる時も
うつるや浅秋れの夢とも浅の野
のこれ仏法のようきのんぞんとよう
仲れきかむまさあかつ おきのさわるの

せんはうやまだやくさいつゝやうせん名
はきにあんらく西方やうわうしゆ覚
しん観世音三世のやくそくしつ縁
あふのみぐ彩しやさけはかたる法
乃作しちよあまんこてん念うちま
ひといのくんをうつるもるあんあふとも

りせうまんのいふかきんおもうてことも
ふかきのりの甚深の御ひ
やおさがしやお観音のほとけを
くしはいのもかさのおぼきつしい
きわめのけれとふかんおふどしく
さうのまやうすなよわりもつの

うらの世ならばこそ親とやおもひて候
情とぞ呼ばれし定めなき世のならひ
ゑずのふるひとへにはのかそとふひ空
の数くりくりちとちりて候らく
涙は織の浮めの幻の色見へ
鳴る音の面影のあはれなりそ

形やうつくしかりしかそれはいつ
く姿ひと消くる朝露ともにおれ
まくさんやりの月もかそひて光陰
と済ともやまやあなまいそう世
の跡ひなりぬ何の色お移く涙
とりせむやくそれ節もしけり

かんわうくだいは代よりかうといふたるの
八伯骨とかりくやうまんよ桔ね
昔ハ源平さうれいしてだいをまもり
しゆらの代と源のまつりことさため
くわんとうのまつりことをほしかれ
保元平治の世の乱いらい時のうんかん

六はらはいつしか馬のはねにおふ佛の寺と
川はおほひあり長羅小堀子恵源
義平ハ石山なてにはかりしとあさせいて
ふさいは叶孫ハ力のなくうとまく
つよくかきせてまとふみちの三石んの兵衆代
とハ源平兵衆のあまてし源の是も動をと

らされぬ文義給へは色よわかしのまのろ
ちは落給おきこと我身を頼む末の下
に雨もつかくやさしく給はおひんなる
道は色田はいのひつかいおくさき末とは給
事そやいつおるはは前のたまし恐れて
女人のひく我と我まで一段の情のを

久が様よ雑道も此帰ひかよおめ人根
いつの世の終りをや一切のあんしとる
生きの父と我等の女人と生まれ母と
今ハ今のとし新まさらばおなし親
子の心くて此秋わきハ帰ひも歳よ深
ひさしうも悦ひのありかたき道とも此

ん安く思ひ候へ　実もまこと一念の力かな
うれしやさらば修羅の苦患の甲冑も
德を施しき　捨てられぬ身なるを
まことさんげの言葉にて罪も晴れ魂は彼
岸によ　渡りつく　昔を問ふとうあら
抑義経　吉凶ハいかなる事よあひ

行の世となりゆく　橋の源平
両家入乱れ旗は白雲紅葉のあ
変りくるふて運の極めの悲しさよ
川上うく物思ひ勝負の白とのかたいさま
るれ合ひ服はいつるあまへる頭よりも
わかまへ池とさかさまに飛んでずれ飛鏃

のちも大膝を射させて馬にも乗られざりしを
京まではくるしき道にて捨てられんよりはと
ただひとり雑兵の手にかゝらんよりはと思ひ定
腹一文字にかき切つて終にはかなくなりにけり
なごりたゞ青野が原の露と消えぬ跡とひて
ひとへに跡を弔ひて賜び給へ跡弔ひて賜び給へ

定家

曲出一拍子上ル
位閑 居

和 山よりいつる北時雨〳〵行ゑや
さためなかるらん
是ハ北国方より
出たる僧にて候我いまた都を
見す候程に此冬思ひ立
都にのほり候 冬たつや旅の

ゑのおさまることなく雲もかゝらず
ふもとよりまた山もとゝさとを
くものうへのころもやすそ花の袖
はなにたけくらく　袖に花ゝ見よ
ものゝ都の所ならくは無しと
ありくしあうらの風をゝ人やこゝ

ひかり面白や千種八千種十月か
思ひきれこゝろ見色見られくらき
よろづのもとちへ千とせ
さゆまくも都のなをひらかん
かりめぐし歳ぞ色はやまや緑に
ありまふり寿りくれ見まゝ

きなるやうれは、ぎやうよりまいらんとて
さてやうにひゝ（ニテ女引）あふくれ給ふか
しふのきを吹ふハ中々せかひまそ
甲 こゝ今のれまてまいととくさんかれ立
よかくしそこへ 女 それはまて出まれん
恵ドりしるるなかぢきへいとも寐の

めでたうせかふぢにハやうに
甲 さうしてまたかくとこれは花それ乃
ちとせかまうおりぢおり紀
人のまいり所へのまいりてれに
てはそ 女 まいやらかれはの家へ
のまいとさまへ下をもぢ都の中よ

やならんむかしくなきかれし梅わが生みか
まへハことくいきんとまおもざきれの
ろのことくハおんにく奇ととあし
あひしとなりやまゆせささいとひおりうら
といひさんとともおろしめてござや文字
ひのおちやとさとさらめひのにおひかい

それ帯ひかまどもそめ氣も色も
あこあつで見ゑあのハ生一本うら
口手付
梅ハ花系れ室家のつれ主君かたの
爪やや梅とおそれしとこしめ宿のおかい
川生れしのをやん 女 いやいつまでえさ
とめなさいぢすまのおろれ露ともあれかい

げにさくなそしはかりくしきらおりとき
くれ竹のまつさへいつかはりぬなき
世なかわりて神の代の人の海とかはき
まそらめさんびといはさてはまとそれ
思ふくとかつまた末にかりしけ心をゝや
中へきそ実然ながとれ長ふりあさ

まことまいいれぬなきき世にあらた
とおもふ人はわかなかるとかくさ
思今とかれぬはたゞやられえん
いくちとせかはりもそ一声けのや
そら一つれなきいとゝこくに
むとさへこそわかれ今かるとや

あはれしれくまくゆくぴれとこれ
しゝ人のおりまとまらもゆれよ
かうゑさこめかやさいゑのきたる
夕霧くもふのきえ人なまさりかけ
も海のまこそれとあくおまのこま
さろうよむちの露れ風とちとく

玉緒もこそ夕風なわらく
そふかむさ月まくは露よむ志まく
糸らは此糸ら人それ糸
家のまことあくやりく糸りを
何よくはなかく見なりせまこ
うれしくへかきや家見ありせき

あまりとこれハせいさいふかきにつくか
つましひ海とひかくらもみなと花
いつなる人のあらはにくはそ 女 〽花八宗
よくし内志んもとこれはりかにくは文
ひかつらとそていかくはとかい 守 〽土左口
自やていくかつる見いやらあはれ

まくひそれ物くらるゝ 女 〽志ましく
内志んもうそめハかりのいつさの文
まそあつらおひら絹なくおら居
さゝせあひしと定家てあのひく
のはらくらわさうしもそなはさく
し内志ん生絹あくしむあらく家あひ

しうていかの執心かつらとなりて
くにはひまとひたかひのくるしみはなれやらす
邪婬のまうしうもはるけれまたとも
はにきやうとよみてひおらかさく
くるしみを也ひくれん其妄執をはらせ
しへ乃お代ねかく乃ほとけの山のしやうもか

よろしもれ縁のようらしそ
なれ〳〵会ことも会なれとも
あはれ思ひのなきかなの
秋の花もさかりにおそからぬ
とくえかつくの中をあらはし
有為のおもとせいをうらしものそかし

定家

もなき〳〵わか玉しひよわる
もいはちらて世にいかにおもひ
乃袖ぬれおきのむしろきあひ
世しとみそきも世しかりのいのちのや
けしとそおもふらふ身を玉の緒やう
ともともなかはれ人のちきられぬ

よやくそいかなしきつむきもとしく
わか世なれわかれ中の名はふりて
よそのはかなきそのをなそ
き間のなわはれかよひちもえて
てかるとおもはれとてもめくれひめそて
とりかくれしかなやみあけくれてやま

定家

おもんみちやなきさ衣かへつまのあられ
雲を抜いしんかまくらかつ枕の
ていかはらと見なからくれはあれ
いさなくしめしを庭そつくすら
の跡とく涙とゆあとろれをとむ
もとは是露きえてよれをうへ涙をまう

とこしとのへやかれゐのと字
うれしさを猶なくうれいはわやや
ほとこ生を庭人やこ生とくとかれ
乞かうしくいわさらみれすてにられ
しれはくわゐちおもとよりなき

地
よしやよしなきあまりちえつくやかよき

名をとへば今はいはじ我も
そのまゝくしらんまゝあらはれて
まことは恥しのけふの
はおもかげ、かくれなく
さかつらひとたびあはれと
見えくる白雲ゆふ暮

くろ月はよく松風しかと
てらすひかりの露の身の
むの夢のよ、ぬれんばかりやく
夢とよるふしのよ月よ
もしろつくのかそれむりいせう
ぬれたるはしたかちいせう

かくいふ海人となく さ海くあ
つをかれ花をもちらして
ちるくよわかれの雲 伊勢の海士
あさとも今これ身をもうらしも
絶しも流ていむをやうろ世をわたわ
とも何中の草れをけさる

ふしてもえつまなき
むかしれ海となくして
ていりは乞ひの人の宿や漁 薫て
つくれなるさ海やかわへいつかや門
海よりとも所よりつら人はもたい里
ちやうりよちのふり 浮人たよりかり
なれどもみのもくちかれるとはわたらる

とゞろくひれていつくしき月とたち
あまくだりぬるしるしとひかりあらはれ
ざうろうや星とく光明のかくやく
さうげんなりけり中有やまやしやう
ちんふかくさきぬるかなしみたさん
のりをぞひけとおとくかゝる

せかいに便し然るうちや是
見そへなる法のおしへあまね
き縁のめぐみをうけとく二つのあ
三つもなさ三の法の恵みをきく
つき落うのひくぐ尽きまつい
なびきとえ出でいつりく

かなしともはろくもをひろかれ
よ給くしとわしよのか鳥乃くりてく
とわしろろきのとよはらとんか
いはらはわり雲井の花の袖を
うと今かうへとなみまひかえと
とあ給もおもなのまひれあか

さ夜やかおもかれまひあわらさ
ま夜やかおもなやおりいゆるを
さ夜やかりしよわれ身か月
乃わりし色もくもかからふ
かはし乃まめとももとらふて
あらさ乃露とるうえてもつさなやつ

このしれかりこの鉢をとうぞや
やよしなやよしわれらの篭の中にを
あらうれしやかくとわれもとの
くもひまもなやていれぞひま
とりてやていつはしわかくもとを
ちかきはもまとくぐるにかり

思へ　曲出一ノ程　位煙上ハヨリ立早
和　世とてそん人の振見てぐくおり
こそはくなりん　是ハ流雲
一見の備まくひの我この雁はみく
まのふ象りくひの文是よお教よ
のほしぞやと思ひの雁色なく

かゝるとのらえ関へくゞるとも
あさ川となる木のされ森とうら
ちとく松原ありんと里乃あとを
見のはやなしかゞさわしやの里に
花よりく　詞
鳥は狩りがちに見
まやはの森わきやの里にはまては

月のくまなく宿は稲の宿とかやしや
しまひは見なしさらなやまたる
ゑしらんと名を八幡の宮の前出
わん中て理を求めさらはむとまても
まくらもしてとぢらん御よみがん
うきにつゝ浅の浪乃みかな舟

北とびまよふくものたえまより あらしもし
いへ路ぞそなたさ　つきやかげ
しづが爪南なりけりしかあらうらぞよ
海原と金ばやかのかりそめして
ぱ舟のうらはかたなるぞ惺まつの
しくなかでのうへりをとゞまりたら

まど近きそのねやか　つき影
さ明そなたいつかう人月影と
よわうそ明むしのまみなへ金
ねぶとおほしめさんがよをこか
ひそとよ　やえ山里への
といふなるよへのかくあつこ

つゝみかねたるハかゝるためしハ我とても
世とも也
げに人ハ名ごりのおしさ
かくれやくわきりのハへ何とう
うらみまよ
なれやかれにけり
なごりをいざとハおもふとも
よそく思へハおもひ也
さていとま
ぬれそめしひとつのいろ
おもふ身にもわれやの なごりなき
やさしいとかるうきねとこそあれ
よそりて我をとゝめいとまかさの
あわれさてまく身へハさえてこそ
夕されハわが身くるしうるなりけさ

そらうつやとどろかわれらや一龍鏡も
わまのへのんのやまとゝへのへわうく
や猿へ八世とのかまてる流れ身も我れ
名のみぞたえくと再清れかどの
むかし　何方よりも文小今をと
かんへとがいなる狗ぞ名とおめりと

是ハ近江の湖流乃水宇れにわがやさに
まいらへ命とうかひゝねえとよも
のいざなえんのく深きまの女能くわく
流つくよもとも下わとそうそあり
梅はねえれいさえんりて深き時の表
様くうしくうわ上へわさと師んおちつにふ

らひや　抑も近衛院の御在位の
時仁平のころほひ主上よなく
なくおびえたまぎらせ給ふ事あり
けり有験の高僧貴僧に仰せて大法秘法
を修せられけれども其しるしなし
ごなうはうしのこくばかりなりけるに東三条の森のかたより

くろくもひとむら立来て御殿の上におほへば
かならずおびえさせ給ひけり
是によつてくぎやうせんぎあり
さんぬる寛治のころほひ堀川院御在位
しかく源平両家のつはものどもをせんぜ
らるべしとて

ころもみぢの時をひやしのきよそ

やそゆうのきうろうむうしいおれとや

きよ人のくしうひ我身に二年また

の花よ山路の尾上ていざろうをあを

かり先二よそらあをとられちんぬれてへ

く私の大かりにあしまして あいあう

のあらだんと今やと御名たれわざうか

我おれんれしどく緑雲一むら立来

の私殺のとて 君ひさうとあをふさ

川とかんれどもいの雲中にお中さ泡の

もそとわか 矢とりてうちうひおむ

八幡大ぞさるとや中にまのんして川

ひきひやうぶきみかけ大ふまごにも
てたきこわゑんちやとうち大
さけびしておいみれとかつやさつ
いとわきつなきき後よきのかなか
ぞさいたりろ梅の木とうかりく松生
ハ次かさろ亀たくらかおかれきまゐとうり

じくきくなくるのえれいするをを
つだいやおそ絵かしたんだとろあるうら
なりもうり岩くれかき世てとりあ
ごまこ念とゐずいちつをるらをまかる
引やうろ画されよりなさきのわさみゐがり
ぱるれりハかわゝは社たいむちうか

えんなきめ 地 実や化生のえんぞ
とく 時もしそわきこよひとも
地 おさき世の人よあひ竹の さかさら
なもとりうへよ 地 のきみ人によ
よるのなはよ 実淫なれるあるいは
かくまへぐれるつはうへ鵜の

おそろしやとさまじやわるおそろし
やましさ風しや 浦はやまる浦な
ころじくみな実さられるひわさ
ぱらとも有ももとはば沮仰とど
くだ目まろく 一紙ざやもまぐさくる
世ろん法かいさんのつ尊おまの通るに

隠然やうひやうらいぐわうやう
御国の光 数多や今
二河いと我同性の縁をまさしく
真如の月のよき浄よりひかり光道
末まで弥陀の慈悲やかぎや月日
末の世とかんずはおもてはあらわれ

またしいからぬ恵んぜのやしやうし
おゝおそれおほき御縁や 梅も
我が心ざしの恵んげとおつて仏
法に浄れかたきなんとじとき
やうちらく恵んまんしく東方の
あんらいぶかしくひさやうしう

けむりよりおくよれ殿のとれと
ひさしき六もとおりらばなきなき
あしうくがさしくいそなやまりておお
びんちぬいとせきするを我かとと
わざまといりわもなしにはまひとと
しりざりけり然汲りのきえされよわりまい

魚んあんらせく荒とらしくと地
よろしとまうくたちまちれにめ門せ
うらおもえへわ海さか冬されわい
君乃ぞ代ぞけとわさしろまき令
そおりひえうまたなきに討ちあらた
宜う仰んわけくたてほてきて御

くんどれ波よくこそしゆくとうらみ
犬宮のゆうくさぎきもとおりの風しお
つまうしらありとうつまゝし八大臣
ほうあまと ほとぞ八名とも雲弁
まおぐ酒のおと綿まゝしばしわ波
みよのひざとつあくれの神とひら

ど月とまとう見かゝのけくゝのこゝろ
月丸りふましもくと仕ち酒ゆんと
橋のは花と春波まゝ八水波八名と
わもとく我八名とかうまとうかが舟
まおい、まつまくまと月ののよまとつ
なかまつかいとなのごうぐきのとおお

おしのや野らへのうさとにあかつき
とまりぐちなきはりばゞ女ハ
月を力んもどきさわくまき道にぞ
まづならなくに照を山のいかる
くに照せぬ山のはの月と共に海月
もまする海月もまする〈まづり

紅葉狩

曲出テ程ノ張
位中打切ヨリ立

時雨といそぐもみぢがり母
ふかき山ぢを尋ねん　是ハ山わ
さらよすむ女なり　實やかく
亀くら紀世ふもそしれ今ハなや祝
白お云ゐ八まもしろてまけ出る宿

のぞみしこゝに人も見ん其林にさ
くだり曲ざく梅か枝もごくるの
こひと哀なり鶯さひしき
名をきくるる夢と詠つゞもの梢
となりしさんともおも出の
色も香も此みぐ月よ夜ひく

上哥
あさまのみぢのうの末の影やそのかんざし
ぢくわしのすかみ花も夕かく
ひきをいそ山の木すゑに実
やがてよ風のけしきもなし
もも鹿のねもこゝろしてこそ錦
中々にこそ見えしなかなるかな

しほの松と流るゝ体こそあはれや
地 おもしろやはや月出て暗くも霞
冬の錦と見る夕紅葉ならでやあら
の枝あるとある人のよそを友とす
面白さしはし あけぬとくのへなや
山よりおもひの吹送る風のまにとも

駒の足なみしるしも見えす年おりやた
けんのあはれさらに入相の鐘霧
冬くれぬるをとこ山のけれよふるの
のきに苔むすまでを友とする風
のしるしもとんせよく 上 いにしへの
地 川業よ 甲 おもひ山路よりあはれへ今

けれ見えてはいかなる者ぞ名をと尋ね
て来り候へ トモ「畏て候 名を尋ねて候へば屋
とかさま上臈のたゞ打まはし屏風を
立て酒宴の半と見えて候ほどに、
誰とも名をば名乗らずと申し候へば流
かゝる山路に 甲「甚[illegible]

たれ人にてもましませよ[illegible]
くもゐの上臈のさかもりなれば 紅葉
かり酒宴の御なかへさうなくも
くのうち通りなば すこし[illegible]
馬より下り沓をぬぎ道を変て山陰
の岨のかけぢをとをざかりつゝひそ

くひろさく　冥やねなしぬ身
猿乃山のおくよこそ人ハなしとおもふ
ろく　独活乃紅葉ハのぶをえたるかし
これせん　我ハ旅乃たよりの滝の口也と
かれにとふどそれく思ふ計なり
思ふまわしらぬそれたる世の中ねん

のへ外役よ立まらぬ事し　あひよす
かれよや何よふ我とハらあの人さと
ぞろねやうれくをとさもハ　甚情なる
けるやゞ一村雨乃雨やより　一樹のけふ
立よわて　一河乃ながれをくむ酒といそ
のかん絵のふへそんゞ恥しかするも寝よす

うら菊もまへぶとりの花末にわすられん
よくも立寄りかはやるゝくの酒何に
菩しうさこたやこまいとせめ白を
志とハ捨難き人の情の盃のぶくと染
あはれなりとや月人の酒とわくめ
てうつえうとくとやむ真面目やあか

らいしゆうの君もしろがらしく神を
紅葉衣にはかさりうけとせめ山の世人
九月重陽のむ月をかうく計ならぬ宿
まこと人をあまうらん行の知らぬ露
汁ふうきとはふしきの盃よむも之
かすかんやさかしい枕をいましめたいさ

まくおもひしにて いとゝ心やうらみ
ならやんまよこし 頼めし人の乱れの花蔭
うき節々文よりも心ひかれし山桜
よそ乃ころめもいかなる うやさしき
光くもおぼろ 世の契り浅からぬ ゆかしき
情の名残りて かれも 夜のゆふがほの

柴の庵のうちを出て それかとも
未だ夢路の行くとしらば とよ人の
も白露の 立ち帰る 御身をなく
てなくも ありし夢の わかれの 暁
もとなりし つまさきの 袖のまゝきさの神
の夢の中に いつかは 夜の月のさき

す袖も露とめくらとたかくらべを
こゑえすこえてせいし
かちゑ入は楽ふせいとのゝ花
見やりて夢の夜は雨ちるそく
秋あらし風袖もさまし山陰よ風
猪狩のさる縁よかしく袖も露から

しづさそひまいかゝおよくわく
浅ましや秋なるむらやれ酒の友い
人のまるむ浮もあさうれわさか
夕暮れ若しもろき枕ならいくれ
見えし天地もひくき風ところふさき
もろくね山中よおほつかなやれそろ

しや物をや今迄まとつ安くと
思ひけるそれ湯とわるわるひ
いもかりよふ云あんまあいえとふれ
加の所とかりしげんやう文のだるふ家
くれ七尺の屏風のよよ根わするまも
さけ五丈の鬼神のぞれのるゆくすがた

八日月面とせくへさ様そなかれ里にし
のらかとさこ手すかく宮まうみか
もさなきあんだおもしや八幡大ふさ門
とんは合しほうさとぬいく御うけ
あへいかんちんよあさんとうえんてかけ
ぢやひちりひいひしまとこうきまわれき中

かしこき手向とかへさんとれうそおもん
ともろともにおひとへにとなへきさま
とをしれいも得よの御とびさかれ
あさましとせゝらまき鬼神とよ
とへのふいといひの得とこておそ
あらしけれ

右此本者観世左近太夫
以章句寫之并加當流
秘密悉令改正者也
于時元禄十丁丑年　林鐘日
寺町通二條上ル町
寺田与平次新刊
（印）